

Program

ソリスト：脇坂 今日子 WAKIZAKA Kyoko (Piano)

C.ドビュッシー：ピアノ三重奏曲 ト長調 (遺作)

Claude Debussy: Piano Trio in G

I. Andantino con moto Allegro

II. Scherzo: Moderato con Allegro

III. Andante espressivo

IV. Finale: Appassionato

ソリスト：山本 悠流 YAMAMOTO Yuri (Piano)

A.ドヴォルザーク：ピアノ三重奏曲第4番 ホ短調 作品90「ドゥムキー」

Antonín Dvořák: Piano Trio No.4 in E Minor "Dumky", Op. 90

I. Lento maestoso — Allegro quasi doppio movimento

II. Poco adagio — Vivace non troppo — Vivace

III. Andante — Vivace non troppo — Allegretto

IV. Andante moderato — Allegretto scherzando — Quasi tempo di marcia

V. Allegro

VI. Lento maestoso

— 休憩 Intermission —

ソリスト：今井 理子 IMAI Riko (Piano)

※賛助出演 有富 萌々子 ARITOMI Momoko (Viola)

W.A.モーツァルト：ピアノ四重奏曲第2番 変ホ長調 K.493

Wolfgang A.Mozart: Piano Quartet No. 2 in E-flat major, K. 493

I. Allegro

II. Larghetto

III. Allegretto

Program Notes

脇坂 今日子

C.ドビュッシー：ピアノ三重奏曲ト長調(遺作)

この作品は、フランスを代表する作曲家クロード・ドビュッシー (1862-1918) が 18 歳のときに作曲した室内楽作品である。ドビュッシーはパリ音楽院に在籍中の学生であった 1880 年の夏、ロシアの富豪フォン・メック夫人の家族と欧州バカンス旅行にピアノ教師として同伴した。そこで一緒に滞在したヴァイオリン・チェロ奏者とピアノの合奏のために、この作品の作曲に取り組んだ。ドビュッシーの室内楽曲というと、弦楽四重奏曲や晩年のチェロ・ソナタが有名であるが、この三重奏曲が一般的に知られるようになったのは作曲から 100 年以上も経過してからであった。しばらく行方不明であった楽譜が、1982 年にドビュッシーの弟子モーリス・デュメニルの遺産から発見され、1986 年について初版が出版された。

作品は 4 つの楽章から構成されている。

第 1 楽章／美しく繊細なピアノの前奏から始まり、フランス的な雰囲気漂いながら、ヴァイオリンとチェロが歌われ音楽は次第に盛り上がっていく。風のそよぎ、木の葉の囁きなど身近な自然の音や光の戯れが聴こえてくる美しい楽章。

第 2 楽章／冒頭は、飛び跳ねるようなピアノの音型と弦楽器のピツィカートが交互に現れる。はっきりとしたリズムと、おどけた調子が遊び心溢れる楽章だ。

第 3 楽章／この上なく甘美で感傷的なメロディがチェロ・ヴァイオリン・ピアノと順番に歌い交わされる。感情の推移に応じて調性が目まぐるしく変化しながら、しだいに音楽は穏やかに落ち着いていく。

第 4 楽章／情熱を内に秘めたト短調の主題がピアノで奏され、やがて 3 つの楽器によるユニゾンで強調される。ここでも主題の展開と変容に従って調性が次々に変化され、若きドビュッシーのエネルギーが散りばめられた魅力的なフィナーレである。

山本 悠流

A.ドヴォルザーク：ピアノ三重奏曲第4番 ホ短調「ドゥムキー」作品 90

チェコを代表する作曲家であるアントニン・ドヴォルザーク (1841~1904) が作曲した最後のピアノ三重奏曲。ドヴォルザークの作品の中でも室内楽屈指の傑作であるピアノ五重奏曲第 2 番 (1887 年)・ピアノ四重奏曲第 2 番 (1889 年) に続いて 1891 年に作曲され、この時期に彼がピアノ付きの室内楽曲に対して旺盛な創作意欲を持って取り組んでいたことが分かる。

表題の「ドゥムキー」は「ドゥムカ」の複数形。「ドゥムカ」とはウクライナの抒情的な叙事詩が起源となって発展した民族的な歌・器楽曲のことを指し、19 世紀に一形式としてスラブ諸国で流行した。「ドゥムカ」はチェコ語で「熟考、瞑想」を意味する言葉でもあり、曲中でも瞑想的な表情が垣間見える部分がある。ドヴォルザークは本楽曲以外にもピアノ五重奏曲第 2 番第 2 楽章やピアノ独奏曲 (Op. 35) 等でこのドゥムカを用いている。

このピアノ三重奏曲では 6 つの短いドゥムカが連なって配置されており、伝統的には 3~4 楽章で作曲されてきたピアノ三重奏曲としては異例の構成となっている。また、それ以前のピアノ三重奏曲には必ず組み込まれていたソナタ形式の楽章が見られず、主題や動機を分解・発展させながら楽曲全体を統一していくような古典的手法も用いられずに作曲されており、ドイツの古典的な形式や書法から離れて、真にスラブ的な土着の精神に根差して書かれた楽曲といえるだろう。

どの楽章も異なる性格を持つ部分を二つ以上含んで構成されており、全体を通して非常に変化に富む楽曲となっている。それぞれの楽想がまるで即興のように矢継ぎ早に展開されていき、嘆き、喜び、諦め、怒り、愛情、郷愁といった多彩な気分や表情に富んだ世界が繰り広げられていく。ピアノ・ヴァイオリン・チェロがソロやデュオで大胆にメロディーを奏でる部分では、スラブ風のメロディーが散りばめられており、チェコの作曲家であるドヴォルザークならではの楽曲といえよう。

今井 理子

W.A.モーツァルト：ピアノ四重奏曲第2番 変ホ長調 KV493

1786 年に作曲された W.A. モーツァルト (1756-1791) のピアノ四重奏曲。朗らかで快活、そして祝祭のように華やかな 1 楽章、抒情的で静謐な 2 楽章、軽やかに舞い上がるようなロンドの終楽章で構成される。時折モーツァルトの同時期のピアノ協奏曲に近い音楽的要素がみと取れるが、各楽器のバランスの良さと掛け合いの巧さ、多彩な音楽の流れは、彼の天才的な作曲技法の成熟によるものであり、この作品もまた洗練された室内楽作品のひとつである。

楽曲の聴きどころは、なんといっても弦楽器とピアノとの対話の優雅さ、そしてそこに含まれた彼独特のユーモアと軽妙なタッチである。楽器それぞれが持つ特徴的な美しさを存分に活かしつつも音楽の流れの中で一体となり躍動感が生まれる瞬間は、より根源的で純粹な音楽の喜びそのものを感じる。

第 1 楽章 Allegro

長調ならではの広がりを持った軽快な主題が交互に現れる。そこにはピアノと弦楽器の間に紡がれる掛け合いの面白さがある。ピアノの華麗なパッセージとヴァイオリンがそれに応答するようにメロディを繋ぐ部分は、ロココ調の装飾的な美しさを感じさせる。また、チェロが時折主題を受け持ち、全体の音楽に厚みを加える場面も見所である。当時まだ珍しかったピアノ四重奏という編成は、高音部と低音部の架け橋となるヴィオラの存在が重要であり、モーツァルトの洗練されたバランス感覚によってさらにその豊かさを増している。

第 2 楽章 Larghetto

静かで深い抒情性が漂う。ここでは、変イ長調のふくよかな響きを持ったピアノとは対照的に、弦楽器が繊細かつ色彩豊かな三重奏を奏でる。そこには、緻密な音の対話、内声の中の静寂、そこはかとない音の移ろいの美しさがある。

第 3 楽章 Allegretto

軽やかなピアノの独奏で始まるロンド。この楽章では、ロココ調から生まれた遊びの要素と軽やかさを持ったリズム、旋律が展開されてゆく。楽器間の対話は 1,2 楽章を受けてさらに活き活きと勢いを増し、全楽器が一体となって盛り上がるクライマックスへと向かう。